



菊地 優介
(きくち ゆうすけ)

東京理科大学
理工学部
建築学科



人は人と依存し合いながら、寄り添いながら、生きていくことが理想の「集合」のかたちなのではないか？

それは現代の集合住宅では成すことができない。

依存し合うことで生まれる新しい住まい方の空間の提案。

現在での集合住宅の問題として、空家率の増加、単身者または高齢者の孤独死という問題は、集合しているにも関わらず、コミュニティの希薄化が顕著に表れている結果生じた問題でもある。

この問題は生きていくための共同体をつくることを目的としていない、大量供給型の集合住宅のかたちが大きな原因であるのではないか？

生きていくための共同体をつくる建築としてのかたち、空間を集合住宅で考える。



講評

この集合住宅には、「依存」し合いながら生きていく「弱い者」同士の「群れ」が投影されているという。しかし、本作の図面や模型などに表現されている人々の生き方は、決して「依存」し合っているようには見えない。めいめいが所持品を最小限に抑えつつ協調し合い、おたがいの生活圏を尊重し、親密圏のあり方に敬意を払い、その上でのびのびと生活している様子がある。ここには、社会の一員たる、自律した“個人”の姿がある。作者の創り出そうとした空間は、この個人像の集合によって完成を見るのであろう。興味深い社会空間である。だからこそ、ここで暮らす人々の“リアル”を表現する必要があった。たとえば、構造・構法や生産性、素材やディティールなどが的確に示されていれば、人々がこの居住空間の中で感じ取るであろう空間の豊かさを伝えられる作品になったはずである。そしてそれは、空間の豊かさであると同時に、作者の考える、真の意味での“生活の豊かさ”の質的表現として、現代の日本社会に向けて提案される作品となったであろう。詳細を知りたいと思わせる作品である。

(審査委員：矢野 裕之)